

情報記号論の諸問題

東京大学大学院情報学環・学際情報学府

石田英敬

研究室：駒場キャンパス9号館323

MAIL : nulptyx@boz.c.u-tokyo.ac.jp

URL : <http://gamp.c.u-tokyo.ac.jp/~nulptyx>

<http://www.nulptyx.com/>

わたくしといふ現象は
仮定された有機交流電燈の
ひとつの青い照明です
(あらゆる透明な幽霊の複合体)
風景やみんなといっしょに
せはしなく明滅しながら
いかにもたしかにとりつづける
因果交流電燈の
ひとつの青い照明です
(ひかりはたもち その電燈は失はれ)

アクセスしてみるとうつる
COMPUTER SCREEN のなか
チカチカしてる文字
手を当ててみると
I feel so warm

少しだけ思い出話から・・・

問い

「情報と人間」の関係をめぐって、「東京大学大学院・情報学環・学際情報学府」設立の人類史上の意義を述べよ。

答え

「人類」と呼ばれた生物による文明が20世紀末から21世紀初頭に経験した3つのゆらぎに対する〈愚かな/賢い〉リアクション

3つのゆらぎ

- その1 状況認識：
「人間」のゆらぎ、＜Post- Human＞
- その2 戦略としての「知」のゆらぎ
- その3 方法としての「大学」のゆらぎ、
あるいは、Interfaculty

砂の顔

人間というものはたかだか2世紀ほど前
＜近代＞の始まりに発明されたものにす
ぎず、その間近な＜終わり＞はすでに告
げられている。人間は、波打ち際の砂の
顔のようにやがて消え去るであろう

第1回

「情報記号論の問いとは何か」

目次

- I. Context <人文知>の変容をめぐって
- II. Epistemology <人間の学>と<情報学>
- III. Discipline <記号論>の位置
- IV. Paradigm <情報記号論>とは何か
- V. Strategy 研究戦略

I. Context

人文知の変容をめぐって 「症例研究」

＜文学＞から遠く離れて、＜文学＞せよ

あるいは「人文学者はどのようにして学際情報学者を名のることになったか」

略歴

- ***Hidetaka Ishida***
- *Professor of Information Semiotics, the University of Tokyo*
- *Born in Japan, 1953*
- *Graduated from the University of Tokyo*
- *Studied in Paris(1975-1977, 1983-1987)*
- *Doctor in Human Sciences of l'Université de Paris X*
- *Doctoral Thesis: La Formation de la poésie de Mallarmé (1989)*
- -
- 1988-1992 Associate Professor of French (Doshisha University, Kyoto)
- 1992-1996 Associate Professor (Faculty of Arts and Sciences, University of Tokyo)
- 1996- 2000 Professor of Intercultural Communication, Department of Language and Information Sciences, Graduate School of Arts and Sciences, the University of Tokyo
- 2000- Professor of Information Semiotics, Interfaculty Initiative in Information Studies, the University of Tokyo
- (1996 : Visiting Professor, Department of French Literature, l'Université Paris 8
- 1997-1998 : Visiting Researcher, l'Université Paris8
- 2002: Visiting Professor, l'Université Paris 7)

Fields: French Studies
Language Theory, Semiotics, Poetics,
Literary Theory
Modern Thoughts on Language and Society
Media Studies, Information Studies

Works: Essays on Modern Social Theories
(Michel Foucault, Pierre Bourdieu,
Gilles Deleuze, etc.)
Studies on French Literature
Analysis of European and Japanese Modernity
Reflections on Language and Society

1980年代 <文学><詩学>の研究

異端のフランス文学者として出発し、<文学の終焉>を考えた...

1990年代 <言語態理論>の研究

社会や文化をことばの実践態として考える一般理論の追求...

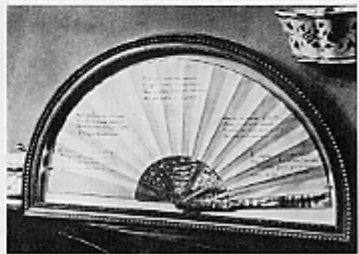
2000年代 <情報記号論>の研究

情報処理の知と人間の意味批判の知との界面を原理的に問う..

壁にそって壁を…pli selon pli

詩学のモナドロジー序説

石田英敬



ジュズヴィエーヴの鏡

「主を失った石肌は壁にそって壁を覗いてゆく」

(マラルメ「ベルギーの女の懐い出」)

すように、閉域のなかで生まれたマラルメの詩は、世界からの絶えざる
限退、自己の壁のなかへの閉じ込めり、として遂行された。《部屋》が、
ここでは、最も特権的な詩的発話の場所なのである――

1 マラルメの部屋

そう、マラルメの詩はこれすべてみな壁である。

イジチュールの部屋の。暗闇のなか、「時の部屋」の壁掛けはその壁を
静かに時がりのなかに垂らし、ただランプの仄かな光が、テーブルの上
に開かれた書物の頁を蒼白く浮かび上がらせている。裏箔のはげ落ちた
鏡の鈍い反映のなかにかろうじて残っているこの部屋の主人の影。やが
て書物は閉じられ、主人公は出てゆくだろう。たぶん、鏡が映している
壁掛けの暗闇の壁のなか、彼は消え去ってゆくだろう。壁掛けの壁が
つくる「時の回廊」のなかへ……壁にそって壁を……辿りつつ。

あるいはまた、「J・YXのソネ」を思い起してみよう。そこに語られ
たのは言葉の縁の壁の「J・YX」(モリシヤ語の《artef. 壁》を語源とす
るハバックス「単独用語例」)を携えての、部屋の主人の冥界下りであ
った。

少年期の習作集の名「四つ壁に囲まれて (Entre quatre murs)」が示

「僕は、自分に唯一の部屋を持ってた時にしか生きられないのです。窓
硝子が、豪華な家具の寶石をちりばめた引出しのように内なる夢によ
って膨らみ、壁掛けが親しい壁となって垂れかかる時にしか……」
(F. コペー宛 一八六六年二月五日付書簡)

詩的発話が生み出す言語的主体性は、マラルメにおいて、この部屋と
不可分であり、部屋との言語的一致が、詩の発話のリズムそのものであ
る。タベストリーの壁にそって、言葉の壁は降りたげられる。タベスト
リーが織られる地であり、またエロディアードの土地でもある。「詩の
場」に歌われた「イデュメア」の夜からもたらされるのは、壁掛けの
壁としての詩の言葉、織物の壁と一致して室内を深いたす詩的発話の運
動である。自己像を失ってへ亡霊と化した発話主体は、部屋と同化し、
なかでも壁掛けの壁がその非人称化した主体の特権的な形象となるマラ
ルメの発話の運動を見てみよう。「エロディアード 古序曲」の乳母に

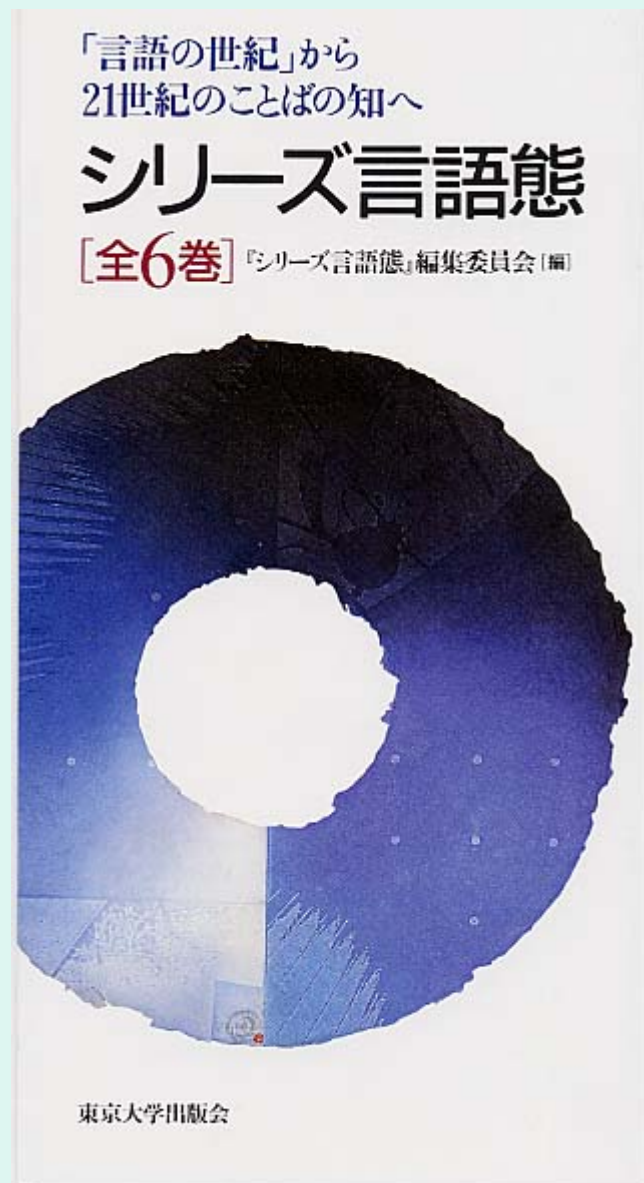
1980年代の 〈マラルメ研究〉

〈ゲーテンベルグ銀河系〉
の周縁部から、
「〈文字〉の文明によっ
て〈文学〉とは何か」
と問うこと

1990年代の 〈言語態理論〉探究

大学院総合文化研究科
言語情報科学専攻の立ち上げ

- 〈ことばの知〉の視点から
20世紀の人文科学・社会科学を
どう捉えるか



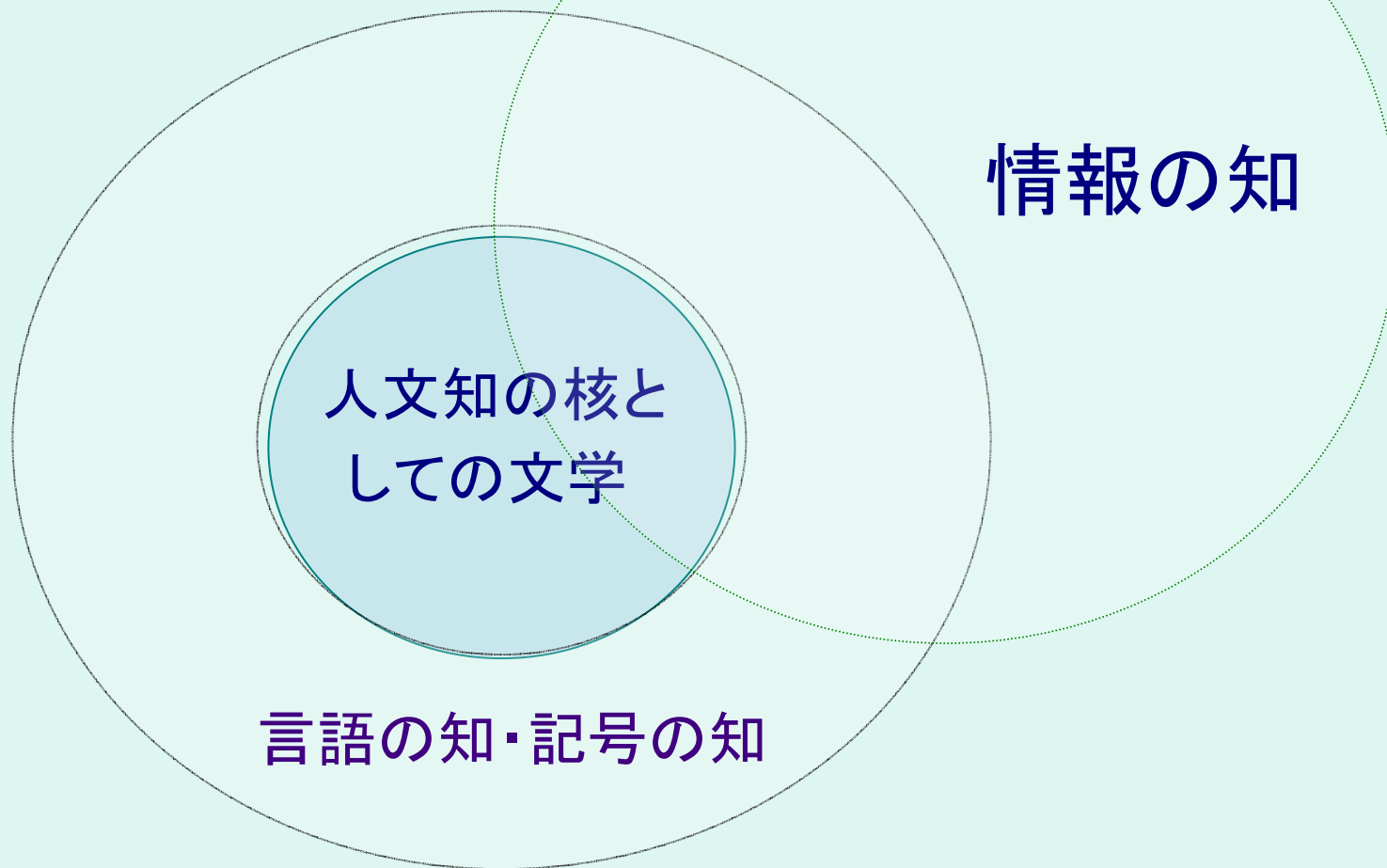
2000年代

「情報記号論」の問い

人文・社会科学と情報科学を結ぶもの

- LockeやLeibnizにおけるように「記号論 Semiotics」はのちにコンピュータを作り出すことになった「人工言語」の探究の人文的系譜だが、と同時に「現代記号論」は〈意味〉を基本カテゴリーに社会・文化をとらえる基本的な形式化の知である。

＜新しい人文知＞という問いの配置



II. Epistemology

いま何が問題なのか

<人間の学>と<情報学>

情報技術革命について私が知っている
2, 3の事柄

「ゲーテンベルク銀河系の終焉」状況のなかで

＜人文知 Humanities＞のゆらぎ
から考える

＜文字批判＞の人としての人文学者 (Humanist) にとって
＜文字/書物＞を読み・書くことによって＜世界＞を認識するという
＜人間の知の条件＞がゆらいでいる

人文知の危機と4つの”ポスト”状況

1「ポスト・モダン」状況

正統的カルチャーとサブ・カルチャーとの区別がゆらぐ

2「ポスト・ナショナル」状況

西欧的な文化モジュールと非西欧的なものとの境界がゆらぐ

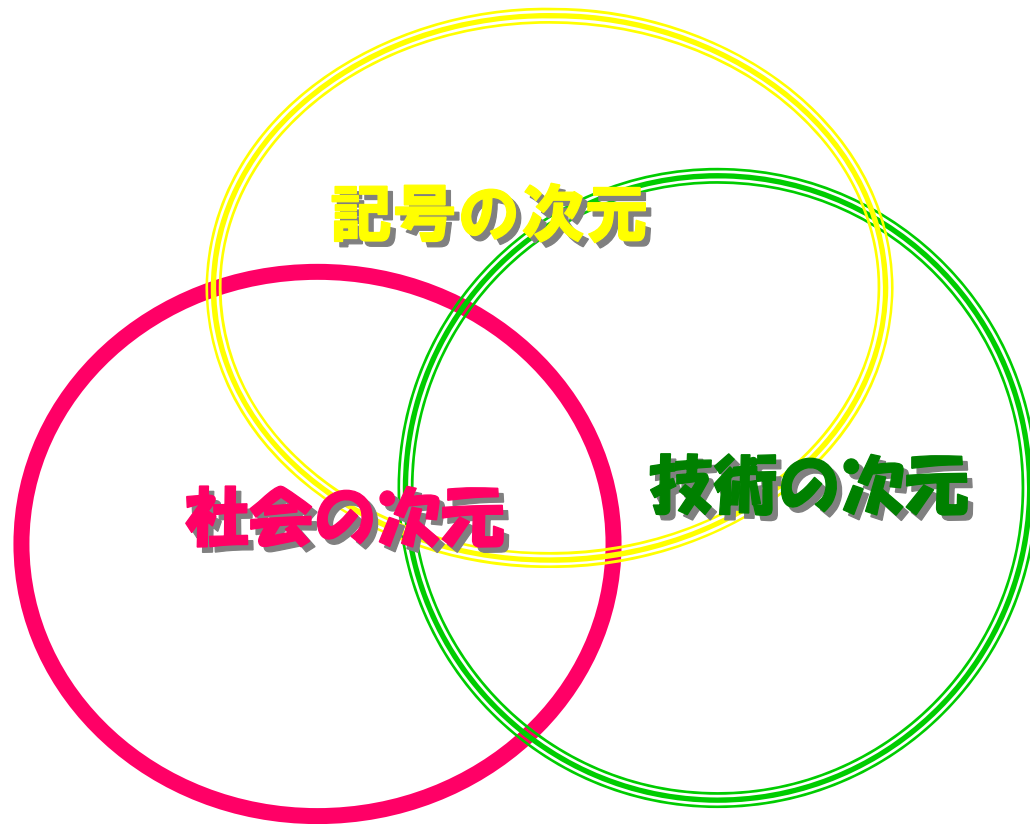
3「ポスト・ゲーテンベルグ」状況

活字メディア的な文化とマルチ・メディア的な文化との境界がゆらぐ

4「ポスト・ヒューマン」状況

人間的なものとテクノロジーとの境界がゆらぐ

＜記号・技術・社会＞のボロメオの輪



この相互関連に起きている文明の大変化こそIT革命

<記号技術の大変化>

<人間>の危機：人間と機械の関係の逆転

<知>の危機：<人間>批判の条件が変化

<意味>の危機：<コミュニケーション>の存立条件の変化

Post-Human(人文知以後)の条件

20世紀の人文学者(McLuhan, Eco, Foucault, など)
とともに<人間の終焉>以後の世界を考える。

以上をまとめると、

＜人文知 Humanities＞とは、
歴史的にはルネッサンス以降＜人間の知＞を総合
してきた＜文字のエートス＞だが、現在ではそれがゆらい
でいる。

＜情報学＞は、
人間文明に新しい＜知のエートス＞をもたらす
可能性があり、＜人文知＞はそれを取り入れること
により、＜新しい人文知＞として再生（ルネッサンス）
の可能性がある。

注：「エートス」とは「文明における知の根幹的態度」のこと

III Discipline

記号論の位置

人文・社会科学と情報科学を結ぶもの

- LockeやLeibnizにおけるように「記号論」はのちにコンピュータを作り出すことになった「人工言語」の探究の学問的系譜だが、当面私の講義では「現代記号論」を手掛かりに問題系を設定する。

アンケート

✓ 現代記号論とはどのような学問なのか？

皆さんは、知っていますか？ Y/N

✓ 20世紀の人文・社会科学に起こったことを知っていますか？ Y/N

✓ 「構造主義」や「言語論的転回」といった言葉を知っていますか？ Y/N

✓ 「認知革命」や「チョムスキー革命」といった言葉を知っていますか？ Y/N

✓ 「ポスト構造主義」や「カルチュラル・スタディーズ」という言葉を知っていますか？ Y/N

20世紀を通して起こった
「言語・記号革命」、「メディア革命」、「認知
革命」、「情報技術革命」を結ぶ線上に、<
記号論の問い>は位置づきます。

「情報学事典」:「記号学」の項目

記号学(記号論)、 英語: Semiology (Semiotics)

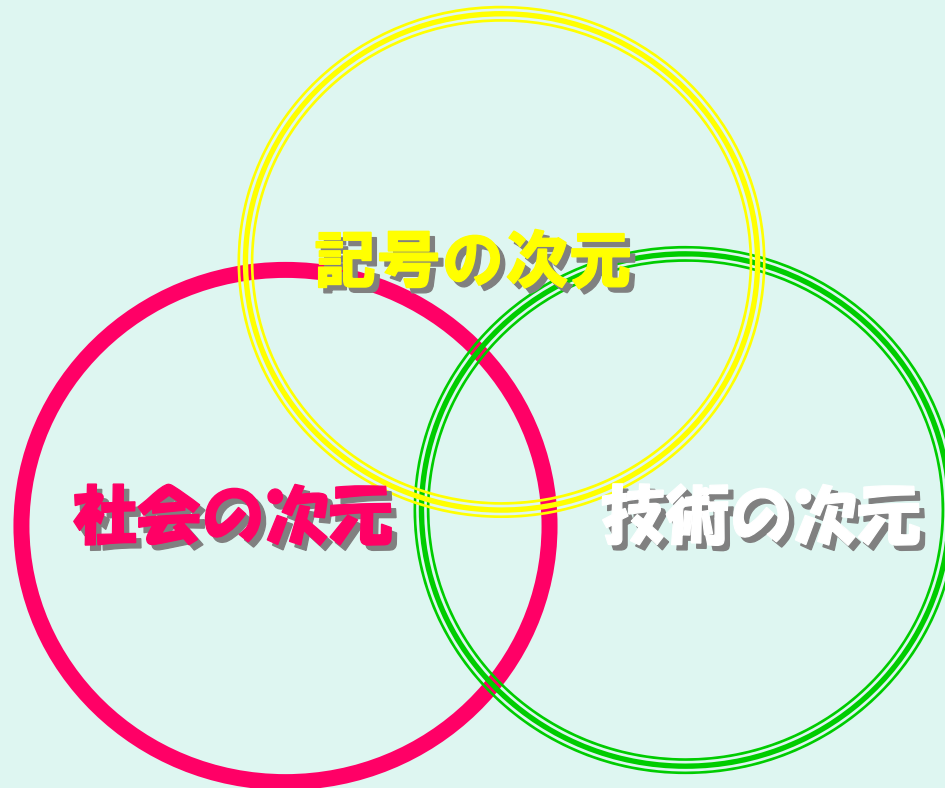
仏語: sémiologie (sémiotique)

自然および人間の事象を記号および記号作用の観点から研究する一般学、「記号学Semiology」あるいは「記号論(Semiotics)」と呼ばれる。現代言語学の祖とされるスイスの言語学者ルイ・フェルディナン・ド・ソシュール(Louis Ferdinand de Saussure 1867-1914)が提唱したのが「記号学(sémiologie)」、アメリカの論理学者・哲学者チャールズ・サンダース・パーズ(Charles Sanders Peirce 1839-1914)が構想したのが「記号論(Semiotics)」である。19世紀から20世紀への転回期にほぼ同時にしかしまったく別個に提唱された「記号学」と「記号論」は、二十世紀の知の展開を通して結びつき、意味活動・記号現象をめぐるインターディシプリナリーな研究領域を創り出してきた。現在では「記号学」と「記号論」は、ほぼ同義とされる。(以下 続く)

「記号の知のインタフェース」

- <言語・記号革命> : <記号>の次元の20世紀的発見
- <メディア革命> : 記号技術による社会の大変化
- <認知革命> : 記号の知と数理技術との結合
- <情報技術革命> : 上記3者の大規模な連関の発生

＜記号・技術・社会＞のボロメオの輪のうち、
記号論は＜記号の次元＞の知のことです



例えば、マクルーハン「ゲーテンベルクの銀河系」やドゥブル
レ「メディアロジー」のような問いはここから可能になる

「〈記号〉はつねに〈技術〉に媒介され
〈社会〉をつくっている」ことが分かる

ここから、〈メディア技術〉と〈文明〉と
の関係を問う動きが出てくる

現代記号論の登場

- Charles .S. Peirce (1839–1914)「記号分類」と「Semiosis」
- Ferdinand de Saussure(1857–1913) 「一般記号学」の提唱 「記号のシステム」

言語は観念を表現する記号のシステムであり、その点で、文字法とか、手話法とか、象徴儀式だとか、作法だとか、軍用信号だとかと、比較されうるものである。ただそれらのシステムのうちもっとも重要なものなのである。

そこで、社会のなかにおける記号の生活を研究するようなひとつの学を考えてみることができる；それは社会な心理学の・したがって一般的な心理学の一部門をなすであろう；われわれはこれを記号学 (Sémiologie。ギリシャ語の *semêion* 「記号」から) とよぼうとおもう。それは記号がなにかから成り立ち、どんな法則がそれらを支配するかを教えるであろう。それはまだ存在しないのであるから、どんなものになるかはわからない；しかしそれは存在すべき権利を有し、その位置はあらかじめ決定されている。言語学はそうした一般学の一部門にほかならず、記号学が発見する法則は言語学にも適用されるにちががなく、後者はかくして人間的事象の総体のうちで、はっきりと定義された領域に結びつけられることになる。

(『一般言語学講義』邦訳 29 頁)

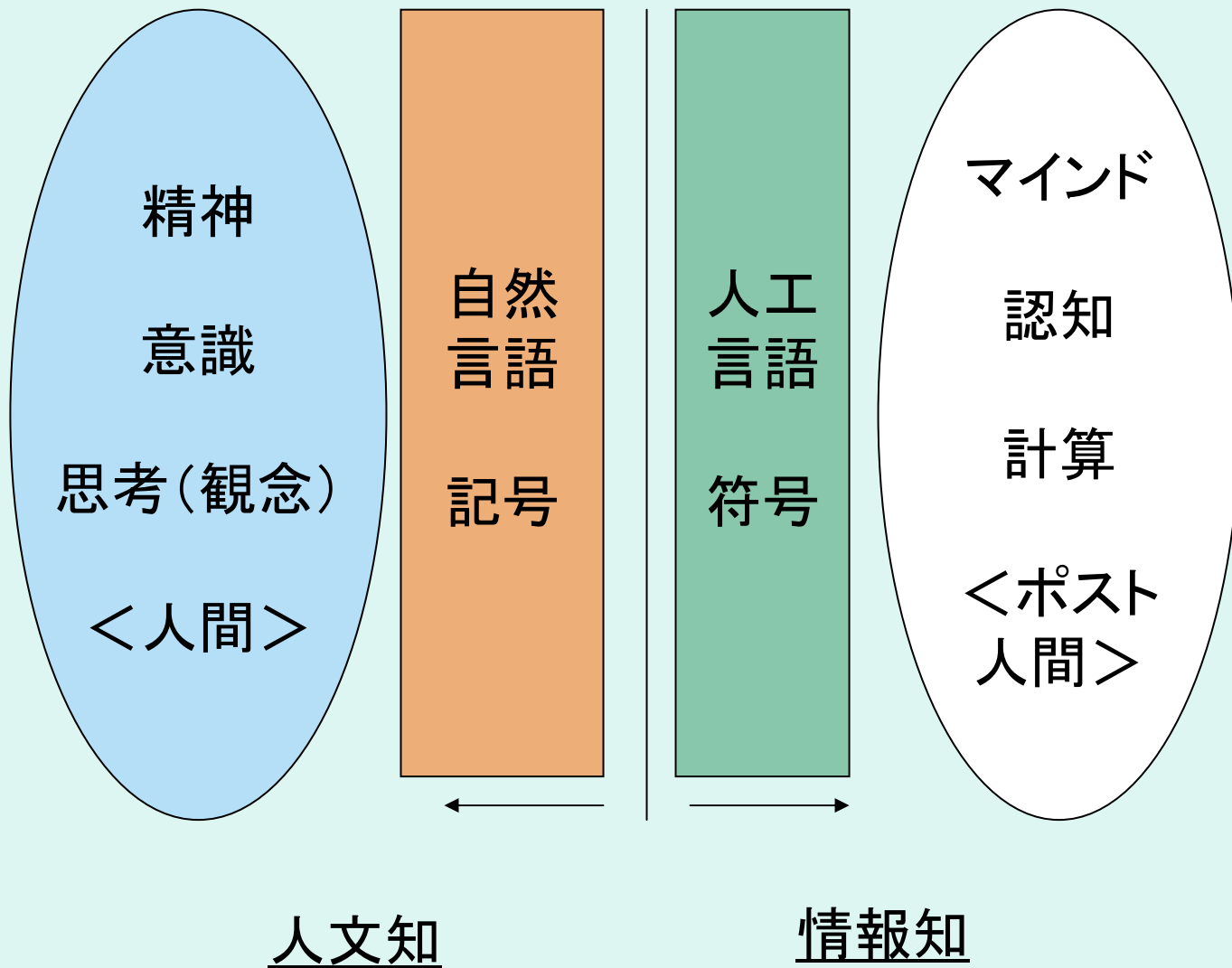
現代記号論の成立とコミュニケーション技術 の時代

- ソシユール「ことばの回路」と「シャノン・モデル」
- ビューラーの「機能モデル」から、ヤコブソンの「六機能モデル」まで
- メディア技術が〈記号の知〉を可能にしてきた時代（「電話モデル」とソシユール、「コンピュータ」とチョムスキーなど）

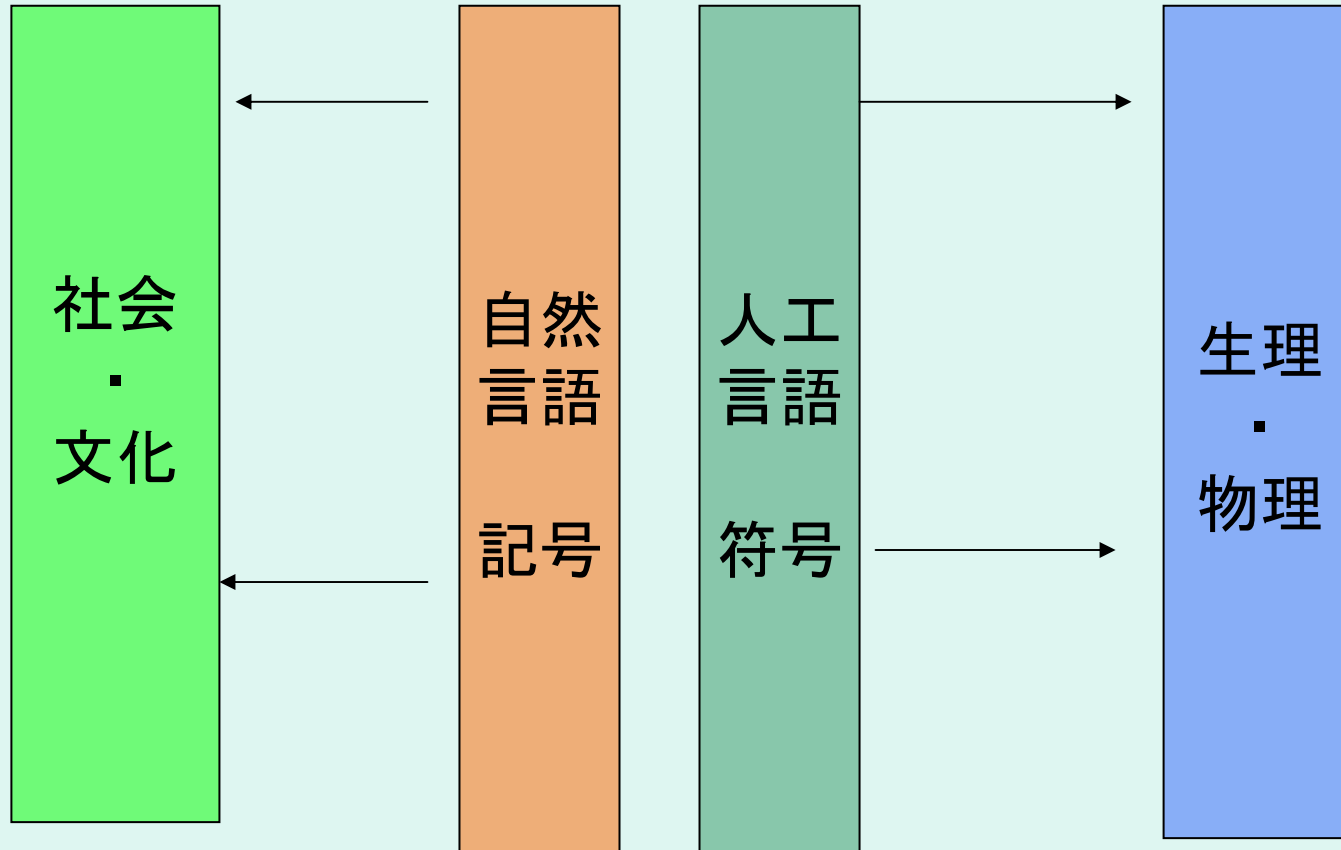
記号論の役割

- <意味の問い>と<情報の問い>とを結ぶもの
- 人文・社会科学と情報科学を結ぶもの
- 言語記号と非言語記号を結ぶ思考
- マルチメディア・コミュニケーションを理解するパラダイム
- 認知科学などと並行するインタフェース

1 記号論と知のインターフェース



2. <社会・文化> vs <自然・技術>のなかに 埋め込まれた<関係>



IV paradigm

〈情報記号論〉とは何か 〈意味〉と〈情報〉の界面で考える

人間の生活にとっての情報の意味作用を研究するようなひとつの学を構想してみることができる。私たちはそれを情報記号論（information semiotics）と呼ぶであろう。それはまだ存在しないのであるからそれがどのようなものになるかは分からない。しかし、それは存在すべき権利を有し、その位置は予め決定されている。

長尾真「マルチメディア情報学の基礎」より、

『人間と情報』

これまでの情報伝達手段としては、新聞やラジオ、さらに動画像と昔の組み合わせられたテレビ映像といった形で進展してきた。将来は情報がもっと総合的な形で人間に提示されるいわゆるマルチメディアといわれる時代が来るだろう。情報処理技術の驚異的な発展が情報通信システムの進歩と結びついて、世界中が一つの情報システムとして機能し、多様な情報が与えられようとしているのである。

このような技術状況がほんとうに人間社会で適切に利用され、人間の幸福と社会の発展に結びついてゆくためには、人間の情報に対する接し方についてより良い理解を持たなければならない。この章は、そういった立場から情報とは何か、情報は人間や社会にとってどのような働きをするものかについて考える。

情報は人間が解釈し、その意味を理解することによって価値を持つことになるが、さまざまな付加的な情報が情報の意味の理解に大きな影響を持っている。そこでまず情報とデータの区別、情報と知識の関係について明確な概念を持つことが必要であろう。そしてマルチメディアとは何かを理解することによって創造という世界が開けてゆく。その面でのマルチメディアの持つ力は大きい。こういったことを含んで、記号論という哲学の世界で明らかにされている意味や概念についての考え方を知ることは大切である。この章ではそういった情報の種々の側面にふれ、将来のマルチメディアの占める位置についても考察する。

『情報と記号論』

-記号論における三つの要素

ここで記号論という学問にふれておかねばならない。記号論はセミオティック(semiotics)とも呼ばれているもので、発信された情報がどのように受信者によって受けとめられ解釈されるかについての学問であるといつてよい。送信される情報の代表的なものは文字からなる単語や文章であることが多いが、道路交通標識のようにある種の記号化された図であることもあるので、これらをすべて記号ととらえ、記号が何を意味するかを議論するので記号論と呼ばれているのである。

記号論では三つの要素を設定する(図1.9)。まず現実世界に存在する対象そのものである。次にこの対象を指し示す名称(記号)である。そしてこの名称によって代表されるものの意味(概念)を第三の要素として考える。言葉による通信やコミュニケーションの場合に、これら三つの要素がどのように関係しているかはすでにこれまでいろいろと説明してきた。記号を送ることによって、送り手が見ている現実や対象が受け手にできるだけ正確に伝わるようにすることが最も大切なことであるが、そのほかに送り手の言いたいこと、意味づけ、概念をどこまで受け手が正しくとらえるかということも非常に重要である。

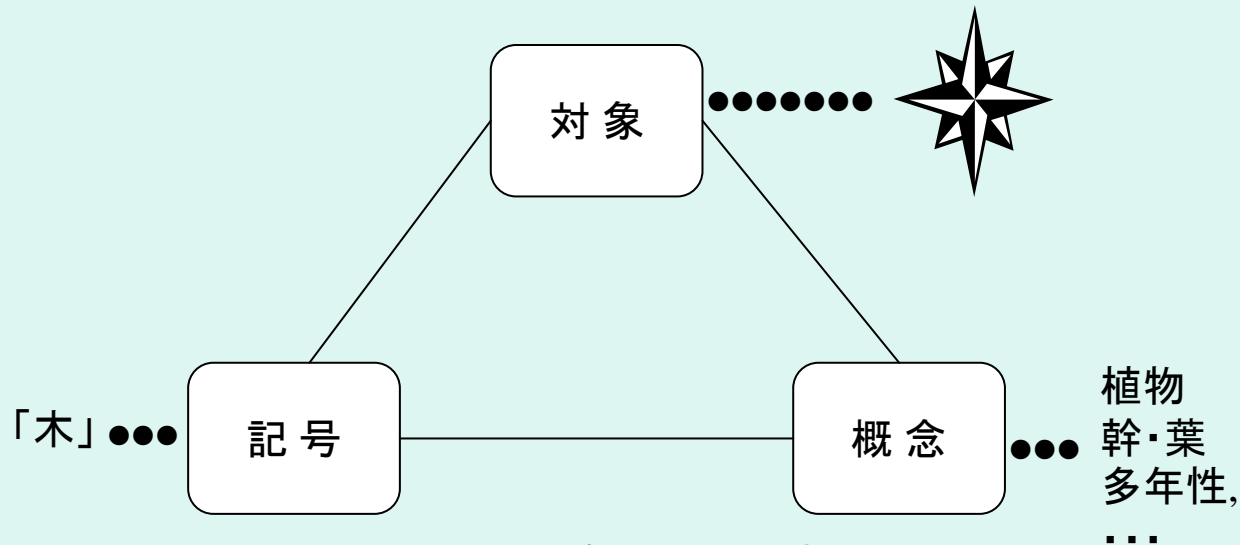


図1.9 記号論の三つの要素

「マルチメディア情報学」についての「記号論」の要請：

この長尾(1999)を手がかりに、〈情報〉・〈人間〉・〈意味〉について考える始めてみると・・・

情報記号論の問い

While people participate in semiosis, machines participate in information processing

- <計算>しているあいだに<意味>している？
- <理系>しているあいだに<文系>している？

こうした<情報>技術と<意味>経験との界面に情報記号論の<問いの圏域>が設定される。

情報記号論の認識論的な身ぶりとは…

- 1) 認識原理への回帰
と
- 2) 新しいパラダイムの追求

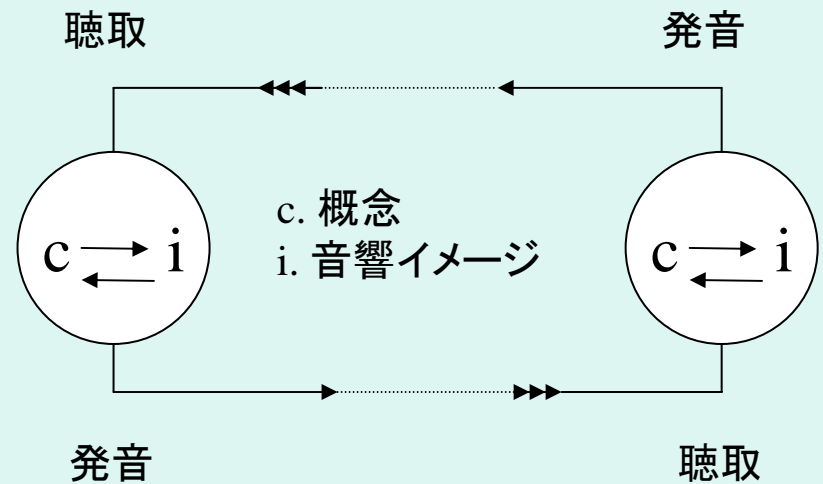
回帰の身ぶりex.1

例えば. 記号論における
communication 図式

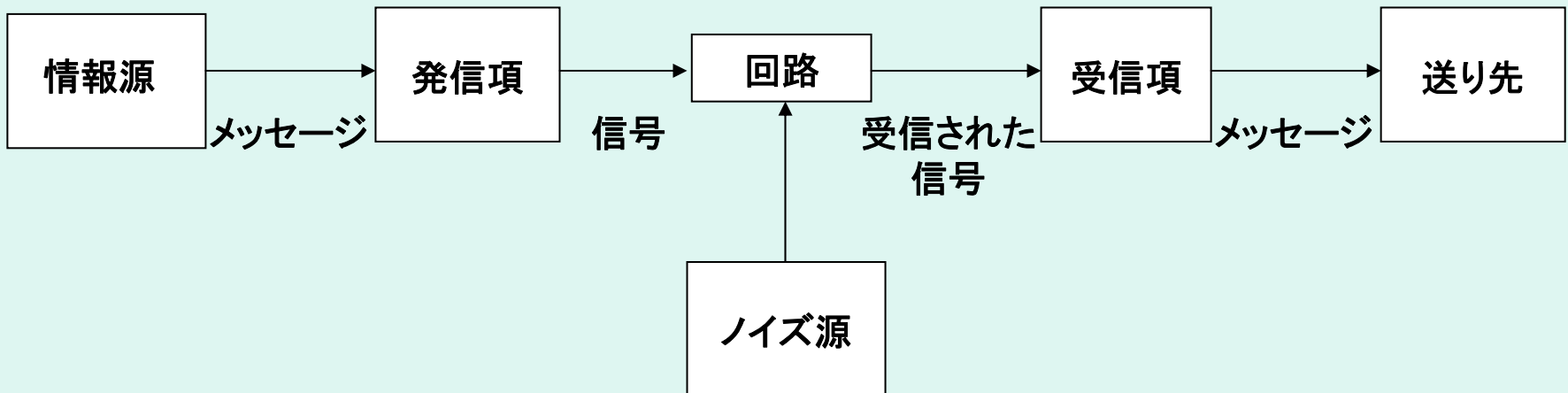
- Saussureの「ことばの回路」
- Shannon-Weaver モデル
- Jakobson の「六機能図式」

1 ソシユール「ことばの回路」

著作権処理の都合で、
この場所に挿入されていた
“PLACE DE LA LANGUE
DANS LES FAITS DE LANGAGE”
を省略させていただきます。



2 「シャノン・モデル」

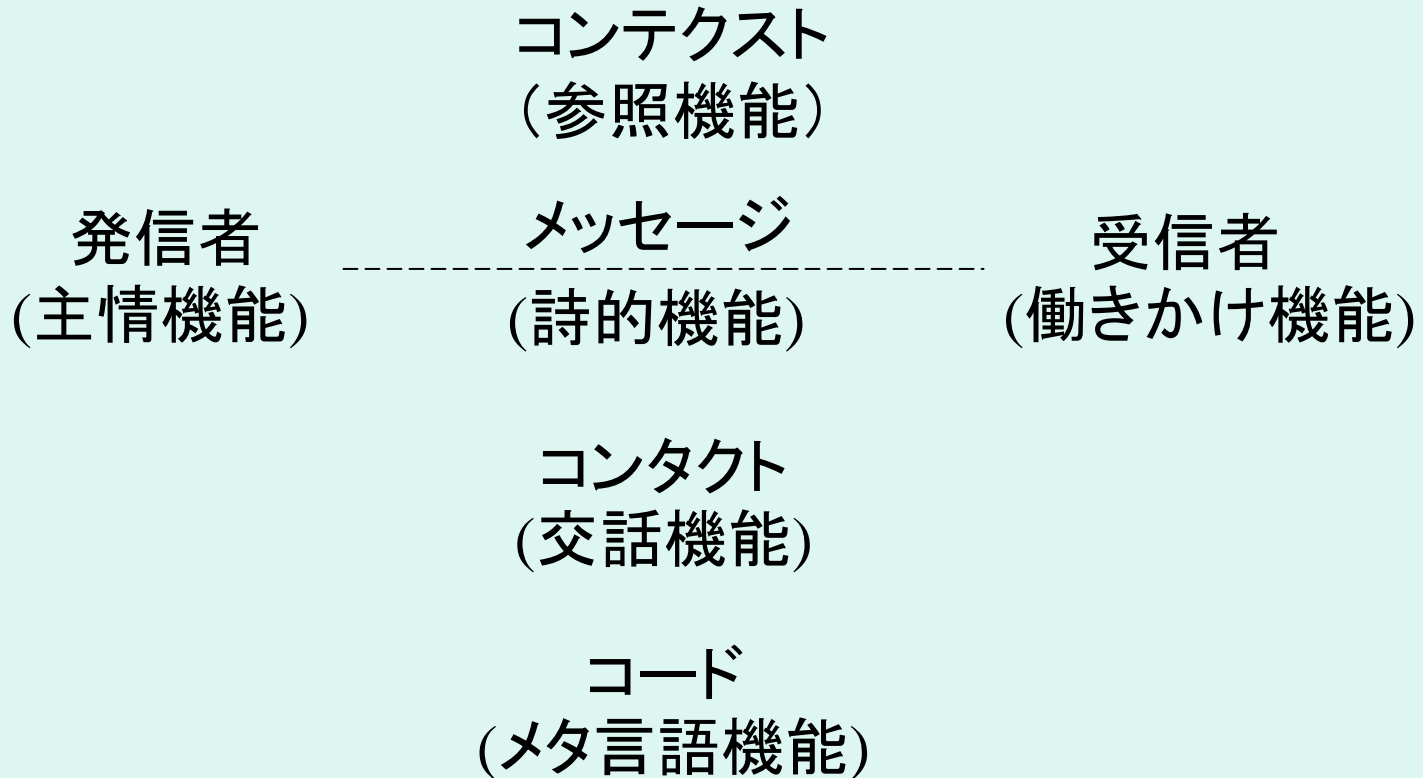


「シャノン・モデル」と「ことばの回路」

著作権処理の都合で、
この場所に挿入されていた
『シャノン・モデル』と『ことばの回路』
を省略させていただきます。

3 ヤコブソンの「六機能図式」

記号活動のファクターと記号の機能の定式化



情報記号論の問いを立てること

- <記号論>の問いをとらえ返す
- <記号技術>に関して<意味の問い>を問う戦略を立てる
- VRなど記号技術が可能にした<セミオーシス>を理解する
- <意味の知>の変容を準備する

V Strategy

情報記号論の研究戦略

I 記号論の認識論的再検討:

近世記号論 (Locke, Leibniz などへの逆行)、現代記号論のepistemology

II 情報記号論の諸問題:

学のインターフェースの組織

III 実例研究:

サイバー・セミオーシスの分析

次週以降のテーマ

情報記号論の諸問題

1. <記号>をめぐって
2. <ことば>をめぐって
3. インターフェース・メタファー・身体
4. Text とHypertext
5. VRをめぐって , etc.